曹洞宗 源溪山長安寺 寺報〔NO.274〕

“源溪山だより”

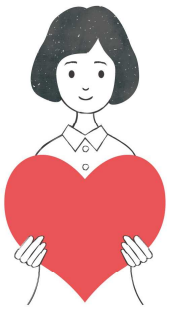
https://chouanji.p-kit.com/　令和7年12月①
住職 恩田仁志　gen-chouanji@aka2.gmobb.jp

◆手を差し伸べて

令和7年もあっという間に最終月となりました。年始めには予想もしていなかった様々のことがあったことと思います。

今月の塔婆裏文は「悲心（ひしん）」。‘かなしい心’のことではありません。他の人の苦しみを悲しむ心のことを表しています。喜びや楽しみを得ることと同時に、苦しみや悲しみを経験することは避けて通ることができません。むしろ苦しみや悲しみがあることでひろがる境地もあるのではないでしょうか。

経典に「悲心をもって施す功徳は、大いなること地の如し」とあります。‘人の苦しみを我がものとし手を差し伸べよう。その心は大地のように大きなものであるという’教えです。



金子みすゞ研究の著書ほか多くの出版や講演などをされ、また高校の教員でもあった酒井大岳老師は、教え子に「悲心」の書を、次のようなことばを添えて贈ったそうです。

「自分で味わった苦しみや悲しみを、他の人には味わわせまいとする、体験から得た真実の思いやりの心、これを悲心と言います」

本年経験した苦しみや悲しみが、次年の生き方に活かされることを願っています。

◆こんな時代に生きた人だったんだな

250回忌と150回忌の年回法要のお勤めをしました。

250回忌は安永5年亡。ちょうど本年の NHK 大河ドラマ「べらぼう」の時代。主人公の蔦屋重三郎26歳。まだ吉原にいて黄表紙本を出版する頃で、8月初め頃に放送された時代です。

法事のご当家の方々と、その様な時代背景のころなのですねと話しをしました。

150回忌は明治9年。こちらはちょうど朝ドラ「ばけばけ」の時代。小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が松江にやってくるより少し前ですが、江戸時代から明治へと大きく時代が動いたころの松江の様子が、伝わってきます。

この時代のご先祖様は、その多くが江戸時代と明治時代の両方を生きた方。ハーンが来松したことに関わる新聞記事もあったようですが、ご承知だったのでしょうか。

小泉八雲は松江にわずか1年3ヶ月ほどしか滞在していませんが、荒川亀斎（あらかわきさい）という木彫ほか多才を発揮した方との親交を深めました。当山にも亀斎の作品（前机、欄間4枚）があり、先日、県立美術館の学芸員さんお二人が調査に来られ、たいへん素晴らしい作品であると聞きました。

このことについては、後日あらためて紹介します。